

体験して身につける

— 大学における英語と国際芸術施設との共同授業の実践 —

多田 恵実[※]

はじめに

語学教師としてよく質問を受ける。「どうしたら英語が身につきますか?」最も効果的なのは、机上の学習に終わらず、学習した言葉を使うことである。そのような実践教育を大学における英語教育でできないものかとかねてから考えていた。青森公立大学に隣接する国際芸術センター青森 (Aomori Contemporary Art Center、以下ACACと略記) では年2回、国の内外から現代美術のアーティストを招聘して芸術活動を行なう。そのACACの協力をいただき、2003年から2005年にかけて共同授業を行なってきた。その実践例をここに紹介しながら、共同授業の効果を考えてい。

§1 目的

英語に限らずどんな語学でも語学修得は机上の空論であってはならない。実践的に身につけるためにはたくさん間違いを犯しながらターゲット言語を使うことである。近年の認知理論と言語学を関連付けた認知言語学によれば、「何度も繰り返し同じ知識のある過程に使うことにより、同過程を元々生み出し可能にした規則に我等はとらわれることがなくなり」「第二言語習得のようなprocedural knowledgeは徐々に繰り返し練習することによってのみ獲得される」(著者訳¹⁾)。また昭和の初期に日本に来たドイツの哲学者が、自らの弓術の習得の過程で到達した禅の境地について奇しくも述べているように、心と体が一体となった状態でのみ、このような技術は習得されるのであろう²⁾。

しかし残念なことにここ、青森の地では実生活

で英語を使える機会は、とても少ない。青森公立大学でも、ロシアや韓国からの留学生は受け入れているが数は少なく、英語を母国語とする国からの学生は現在のところいない。語学教育において教師は環境を整えるファシリテーターであるが、学生が外国にわざわざ行かなくてもターゲット言語を使えるような環境設定をしてあげられないだろうか。

ACACでは定期的に国外からもアーティストたちがやってきては一定期間滞在し、芸術活動を行なうとともに講座やワークショップなどを開き、一般市民との交流も図る。もっとも注目すべきは彼らが話すのは世界共通語としての英語であるということである。出身国もさまざまな招聘アーティストたちは、必ずしも英語が母国語ではない。彼らにとっても英語はあくまで外国語である。世界各地を回って芸術活動を続ける彼らにとっては、生活していくために必要な言語なのである。

第二言語として英語を使う彼らの現実を、学生に目撃してもらい、こんどはそれを学生自身の動機付けの端緒とする。島国日本というが、地続きで他国とつながっていない日本人は他文化に曝される機会が少なく、世界の中の世間知らずである。生きていくための語学修得という切実な現実を理解してほしい。そのような願いから、大学の英語の授業と国際芸術センターとのコラボレーション的授業を行なってみた。

§2 アーティスト・イン・レジデンスとの関わり

英語はLingua Francaとしての位置を確固たるものにしたにもかかわらず、青森ではなかなかそれを使う機会はない。必要性を感じないまま、

※青森公立大学

学生は必修科目だからとしかたなく取っているというのが残念ながら現状ではないか。学生にいかにして、そのような機会を得させることができるか。なんとかして授業で学んだことを実践してもらいたい。これまでも青森公立大学の語学教育支援室（Language Resource Room、以下LRR）の協力を得て、県や市の職員である国際交流員に自国の話をしてもらう、などの機会を設定したこともあったが、あくまで単発的なもので恒常的にそのような機会を設けることはなかなかむずかしかった。

青森市の郊外に位置する青森公立大学のキャンパスの隣にACAC 青森国際芸術センターが設立されたのは2001年10月のことである。それ以来展示とともに、アーティスト・イン・レジデンス（Artist in Residence、以下、AIR）という企画が春と秋、年2回のペースで行なわれている。AIRは世界的な芸術活動の一般的呼称で、日本のみならず世界各国で行なわれている。国内外のアーティストが競い合い選ばれた者が奨学金を受け、何人かの招聘アーティストが一定期間ともに滞在し切磋琢磨し作品を作り展示会を行なう。ACACのAIRでは、国内・国外から毎年4～5人のアーティストが春と秋に選ばれ、ここ青森の地に約3ヶ月間滞在し、滞在中に芸術作品をいくつかそれぞれが作成して展示会を催す。これまでに、日本国内および世界のいたるところから応募があり、アーティストの出身国は多岐にわたり、日本以外の国からはヨーロッパ各国、アメリカ、アジア、オセアニアと多彩である。

2000年10月、ACACの設立前プレ・イベントとして来日していた7人のアーティストたちが青森放送のラジオ番組に出演するため、私は通訳者としてアテンドした。その後、ACACで何度かボランティア通訳を務めるうち、青森公立大学が国際芸術施設と隣あっているというこの絶好のロケーションを英語の授業に生かせないかと考えた。2003年、ACACの行事として行なわれるほぼすべての行事に通訳として協力し、文書の翻訳なども手助けをしたアーティストに、大学での講義に協力してもらえないかとお願いをしてみると、快く引き受けてくれた。それから

2005年にいたるまでのACACとのコラボレーション的授業が始まった。

§ 3 実践

以下、表1の8つの事例の中から5つの実例を紹介し、それぞれのアーティストの背景、授業の方法、学生からの感想等について考察する。

1) 2003年11月27日 クリストフ・ルース (ドイツ)

a) 背景

クリストフ・ルースはドイツ、ボン出身。常に木を作品の素材とし、ACACにおける作品も木の皮を薄く剥いてそれを土台にした版画と、木の皮を巻物状にしたインスタレーション、その素材となった筒状の木の彫刻であった。彼にとっての木は「人類の知というものを広く知らしめ共有するための『本』の材料である³⁾」。自身も読書家で、その作品は「人間の存在について答えを与えようとする哲学の言葉の探求へと重ねられ」、「見えるものと見えないものの関係、概念と知覚との関係、空間の肉感的な配置の関係³⁾」を表すもので、さらに「形と言うものは形而上の本質をもつもので」、「そこに表されている言葉は、まさしく著名な哲学者たち---ショーペンハウアー、メルロ・ポンティ等---の言葉である。…(中略)…造形的手法を自らの媒体とし、人間とは何か、その存在とは何かを問い、探求し続けている³⁾。」学生にとっても思いがけず、哲学の授業以外で難解なドイツ哲学に触れる良い機会になったが、正味50分と時間も限られていたこともあり、レベル的には十分とも思われたが、通訳しながらの授業となった。

No.	アーティスト	出身国	実施年月日	専門分野	レベル*	通訳
1	クリストフ・ルース Christoph Loos	ドイツ	2003年 11月27日	版画・彫刻	R2, R3	有
2	ロレッタ・ビシーチ Loreta Visic	クロアチア	2003年 12月5日	彫刻・ インスタレーション	R2	有
3	マリーネ・キ Marine Ky	カンボジア	2004年 6月24日	版画・ インスタレーション	R2, R3	無
4	アリ・サールト Ari Saarto	フィンランド	2004年 6月30日	写真	H1	無
5	ダグマー・パハトナー Dagmar Pachtner	ドイツ	2004年 10月28日	インスタレーション	E2, R3	無
6	スティーブン・ウィルクス Stephen Wilks	イギリス	2004年 11月2日	インスタレーション・ ドローイング	E2	有
7	ゲレル・マルギット Gerele Margit	ハンガリー	2005年 7月8日	ドローイング・インスタ レーション・装飾美術	E3	無
8	ミシェル・アラード Michelle Allard	カナダ	2005年 11月22日	インスタレーション	R4	無

表1. 協力アーティスト一覧および実施年月日等

協力アーティストとその出身国、専門分野、授業の実施年月日およびクラスのレベルは上記の通りである。

*学生のクラスはTOEICの得点により習熟度別に分けられ、2005年秋ではHonors(H) 475点以上、Regular (R) 470-365点、Elementary (E) 360点以下で、さらに上から1-4の段階で分けられている。

b) 授業方法

60分ずつ二クラス、各回それぞれ30人弱と10人強の学生を伴って、作品を見ながら展示室での講義を行なった(図1)。既に展覧会は前日に終わっていたが、彼はこの授業のために作品を撤去せずに残しておいて学生に見せてくれた。最初に簡単な自己紹介をもらい、青森での滞在のこと、どのような芸術作品を作っているか、以前の作品の写真なども交えながら、目の前の今回の作品について、そのコンセプトについてなどを話す。その後、質問時間を設けた。英文のハンドアウトを用意し(付録1)、講義から理解した点、またアーティスト自身に向けたメッセージとして学生にはすべてを英文で書かせた。

c) 学生のコメントより

(文意を損なわない程度に文法上の誤りを最小限に訂正した。)

- Perhaps he thinks about things profoundly, and what he has is different from what we



図 1

have. I was interested in his work about not showing the painted side.

- I like his thinking about his work. Probably, he told us that the circle means all of things have links. I had much sympathy about this. He has thought many things ever, I think.
- I enjoyed talking with him. I'm interested in a talk with a person who has a thinking that is different from me, so I thank him. Thank you very much!

d) 評価・考察

上記に見られるコメントは最後のコメント欄からのみのものである。付録1にあるように最初の部分ではこの講義で知り得た内容を作品自体と、より一般的な自分のことを語ったことについて、とそれぞれ5つずつの項目として英文で書かせたが、全10項目すべてをほとんどの学生がびっしり英文で埋めてくれた。後に本人に送る、と伝えたこともありその前提が動機付けになったのかもしれない。中には裏面に日本語でたくさんのメモを残しているものもあった。

内容自体が難解なドイツ哲学に対して、素直に「深く抽象的でわからない」ところもあったが、「作品を見たので理解できた」「暖かさを感じた」「懐かしさを感じた」「興味を持った」「見られなかった作品も見たい」など、作品に対して肯定的な意見が多かった。また、「本を読むのと同じくらい芸術作品を見るのは大事」「ドイツに行ってみたい」「自分もアートを何年前前学んでいた」など一般的な関連事項を述べるもの、また「(第二言語であっても英語を)流暢に話す」「英語が早い」「もっと英語を勉強したい」など言葉に対するもの、「アートと哲学は似ている」「内容が深く、共感できた」「このようなアートに触れたのは初めて」など芸術に対するもの、「彼の考え方がいい。円はすべてのものの関連性を表すことに共感した。」「自分の世界を持っている」など内容に理解を示すもの、などさまざまな反応が見られた。またコメント欄以外でも「独自のアート。世間の評価は気にしない。ひと

つものを極めるとそれが普遍的になる」「キアズマというテーマは交差、絡み合い。家族や友人の人間関係を表す」など人生の生き方に思いをはせるもの、それぞれの学生が独自に感性を働かせ、感銘を受けている部分が違うことに気づかされる。いずれも、自分の書きたいことを書くために辞書を引き、あるいは質問をし、教科書では出てこない分野の新しい単語をいろいろ使っているのはよい傾向だった。

質問時間では最初自分から質問する学生がいなかったため、仕方なくこちらから何人か指名した。促されると質問をするという日本人学生特有の気質が見られたが、それらの質問に対する答えの内容もハンドアウトのメモ書きの中にフィードバックされ、より理解を深める一助となった。

2) 2003年12月5日 ロレッタ・ビシーチ

(クロアチア)

a) 背景

ロレッタ・ビシーチは戦火のクロアチアに育ち、両親とともにオランダに移住。その体験が彼女の作品に反映されているようだ。「くつろぎの雰囲気は破局に向かう状況を演出、和やかで親密なイメージを一見無心に用いながら、家庭生活や子ども時代、家族などのどかな話題を侵食する作品。親密さは疎外に、安全は恐怖に激変するオブジェやインスタレーション⁴⁾。」

ACACでの彼女の作品は森の向こうにグラスファイバーの月が灯り、その周りでさまざまな鳥たちの声がスピーカーから聞こえるという日が落ちてからの森の中でのインスタレーションだった。展覧会が終わって彼女の作品撤去後に行なったので、大学の講義室で以前の作品のスライドを見ながらの授業となったが、実際に会期中に彼女の作品を見た学生もいた。

b) 授業の方法

最初に簡単な自己紹介、その後上記のように、彼女の作品のスライドを見ながら解説をつけてもらった。ハンドアウトは1)と同じ形式の英文のものを使い(付録1)、講義の中で知り得たこと、

またアーティスト自身に向けたメッセージとしてコメントすべてを英文で書かせ、その後質問時間を設けた。3クラス合同授業で、約40人のクラスで行ない、レベル的にはRegularクラスで問題はないと思われたが、内容が現代美術という珍しいものだったので理解を助けるために逐次通訳をした。

c) 学生のコメントより

- I spent very beautiful time. I enjoyed this time. I thought that I want her to make more creative works.
- She is young, whereas she has a strong belief and a pride. I think art is only pictures and sculptures until now, but now I know various art through her art.
- I want to know which work she likes the best in her artworks. I am interested in her artworks, because all her works have deep meanings. And I like English more.

d) 評価・考察

スライドを見る形で行なわれ、前回と比べ作品自体を目の前にはしていないので、学生の集中力が若干欠ける部分があったようだが、コメントを見ると彼女の人生や作品に対する熱心な興味が見られた。内戦の中を生き延びて家族で他国に住み、長じて芸術活動を始めることになった経緯をまったく当たり前のように淡々と語る彼女の強さは学生たちに感銘を与えたようだ。作品は「家族」がテーマの人形や布による造形で、より具体的で暖かなものであったにもかかわらず、その背後のショッキングな意味が「入り口も出口も失って窒息させるような状態」であるなど、学生自身が自らのことばで独自に表現し、理解を示したのは良い傾向と考える。また「より英語が好きになった」とはうれしいコメントだった。

3) 2004年6月24日 マリーン・キィ

(カンボジア)

a) 背景

カンボジア出身のマリーン・キィはやはりロレッタと同様、数奇な運命を持つ女性だった。内戦を逃れ、それまでの豊かな暮らしと大きな家を捨て、家族とともにまずマカオへ、そしてフランス、パリに移住、そこで主要な教育を受けた後、オーストラリアに移住。大学で版画を学び、それでも望郷の念やまず30年の時を経てカンボジアに戻る。「移住を繰り返し制限され続けていた彼女のこれまでの生活---分断されたアジアとヨーロッパでの生活の葛藤など--が反映されたインスタレーションを発表している³⁾」。

青森では、青森市内の多くの小学校を訪れ子どもたちと裁縫や、指を使ったライン描き、切り絵など一緒に作った作品をつなぎ合わせていくことにより協働して作り上げる作品であり、平和を祈る彼女の気持ちが現れた作品になっていた。展示室で会期中にその作品を前にしながら授業を行なった(図2)。



図 2

b) 授業の方法

事前に3ページのハンドアウトを学生に宿題とし、授業中にそれをリーディング教材として読んだ。彼女がいかにして国を離れることになったか、カンボジアの内戦の歴史的事実について、作品にこめる思いが書かれた英文のパンフレット⁶⁾を用い、質問形式で問う形で予備知識を蓄えた(付録2)。彼女自身がカンボジアで英語を教えていた経験があり、打ち合わせの時点で精緻なレッスンプランを作るほど、熱心に取り組んでくれた。今回は作品の前に莫塵をしいて車座

になり、彼女の話聞いた。くつろいだ雰囲気
で、またこれまでの作品自体を目の前に見ること
ができたので、極力、通訳を行わずにどの
くらいの理解を示してくれるかを見た。これま
でと同様、本人に見せるという目的で、英文に
よるハンドアウト(付録3)を用意し、英文で書か
せた。

c) 学生のコメントより

残念ながら、今回は帰国するアーティストに
急いでハンドアウトを渡してしまったため、学
生のコメントが残っていない。

d) 評価・考察

作品の中に座って学生とアーティストが話す
というくつろいだ雰囲気の中で行なわれたので、
またたいへん積極的に学生に働きかけるアーティ
スト自身の人柄もあって、交流がよりスムーズ
に行なわれた。以前に彼女の作品作りをボラン
ティアとして手伝ったことがある学生もおり、
自由な形式での会話があった。カンボジアのス
トリート・チルドレンの手型や足型をプリント
した切り絵をつなぎ合わせた以前からの作品を
前にしてカンボジアの歴史と、平和の貴さを彼
女の作品から学んだ。

反応する、という点で日本の教育では伝統的
に聞く姿勢が強調されてきたので、学生が瞬時
にリアクションできないのが問題だとも感じた。
たとえば、日本の教育では人の話は静かに聞く
べきである。何か思ったことを途中で言ったり
するのはよくないことだ。それが反応を鈍らせ
る。けっして、理解していないわけではないの
だが、必ずしも西欧式のリアクションがよいと
は限らないがuniversalな関係のなかでとなると、
日本式発想では理解してもらえないことが多い
のは課題のひとつだ。

4) 2004年11月2日 スティーブン・ウィルクス (イギリス)

a) 背景

スティーブン・ウィルクスはイギリス出身、
当時在ベルリンで2000年から継続中のtraveling

donkeys (旅するロバたち)というプロジェクトの
最中で、それを青森でも行なった。「実物大のロ
バのぬいぐるみをそれぞれの土地のさまざまな
家にホームステイさせたり、学校へ訪問したり
するコミュニケーションプロジェクトを展開」、
「人々はロバを『家』に連れて帰り、それぞれの
家についての考えやスケッチをロバのお腹の脇
についているポケットに入れてくれるよう依頼
され²⁾」、実際に公立大学のLRRにも暫く「滞在」
して学生からのメッセージや写真を受け取った。
展示ではその記録を見せることになるが、展示
期間中にもその数は増えていった。

b) 授業の方法

大学のコンピュータールームで、全部で30人弱
の他クラスとの合同授業。プロジェクターを使
いながら、どのような芸術活動を行なっている
か、スライドによる作品と旅の様子を彼から説
明してもらった。今回はクラスがElementaryでレ
ベル的に理解が困難であろうと思われたので通
訳をしながら説明をした。ハンドアウトを用意
し、よかった点、改善が必要と思われる点と自
由記述コメントに分けて書かせ、英語でも日本
語でもよしとした。たくさんのスライドがあっ
たので、時間的に足りない感があった。

c) 学生のコメントより

- You showed us your pieces. I felt your thought (and donkey's thought) from your pieces. No need for improvements, but if I dare say, I wanted to see your piece directly. I think it is a wonderful idea which you make a donkey and have him meet people in the world, because I think that there is a result obtained only by having continued one theme for a long time. It was wonderful!
- (改善が必要な点として) I wanted you to explain in more detail.
- 写真や作品を大きく見せてくれたので見やすかった。ロバが皆と写真に写っているのが面白い。ACACに行ってロバに触ったら、さわ

り心地がよかった。

d) 評価・考察

今回は事前の打ち合わせの時間もあまりなく、時間的に余裕がなく質問を用意させるなどの準備があまりできなかつた感があったのは反省点であった。彼の人柄に助けられ、不思議な彼とロバの旅をすぐに受け入れてくれるのはやはり若さにあふれた柔軟な学生ならではのことであろう。作品を直に見たいとの要望もあったので、展示室に出かけたほうがよかったかとも考えた。LRRでは彼のロバが「滞在中」で、併せて面白い経験になったのではないだろうか。LRRでのロバへのメッセージ書きこみは英語なのだが、その効果も期待できる。事実、彼の展示作品に加えられた展示物の中に公立大の学生のコメントを多数見つけることができた。今回コメントを日本語でもいいとしたのは、レベル(初級)を考慮してのことだったが、結果的には半数以上が英語で書いた。

5) 2005年7月8日 ゲレル・マルギット (ハンガリー)

a) 背景

ゲレル・マルギットはハンガリー、ケチケメート市の出身。青森市との姉妹都市でもあり、前青森市国際交流員との面識もあり、たいへん気さくな人柄の、そして商業的にもすでにたいへん成功しているアーティストだった。彼女の作品は銀行や個人の別荘などの建築物に使われ、建物と一体化してちょうど、素人の勝手な私見を言えばアントニオ・ガウディのような有機的な生物にも似た作品を作る人だ。ACACでの作品もその有機的な、彼女の造語であるbiomorphというモチーフがテーマの作品になった。

b) 授業の方法

彼女自身がGlossaryとして用意してくれた言葉のリストをあらかじめハンドアウトの一部に載せて予習とした。対象がElementaryであり、そして美術用語が多かったので、こちらから解説をあらかじめ加えた。その上で、その日の話の

中で覚えた新単語を書く欄を設け、また別欄に彼女に聞きたい質問をあらかじめ書かせておいた。講義後のフォローとして7つの質問に答えてもらい、そのほかに自由記述の欄を加えた(付録4)。

実際の授業は一クラス20人で、展示期間内にまず展示室にて行なった(図3)。暖かな光のともる彼女の作品の周りに車座になり、彼女にゆっくりと話してもらい通訳なしで、時々英語で教員から確認を促す質問をさしはさみながら進めた。したがって、Elementaryクラスにもかかわらず授業はmonolingualでおこなわれた。その後、AVルームにて彼女の以前の作品をスライドで彼女が説明を加えながら見せた。ハンドアウトは持ち帰りの宿題とし、レベルを考慮して英語・日本語のどちらでもよいとした。

c) 学生のコメントより

- I think that creating is very important for human. Human must have a fine sensibility for everything and creativity. But it doesn't exist (a fine sensibility for everything and creativity) in education system of Japan now. Therefore I was glad to be able to have this class. You showed us your creativity. And I am sorry not to ask you any questions. So I will study English more, and I'm going to Hungary. Thank you very much.
- 「今まで手がけた仕事の中で、一番大きな作品は何ですか?」の回答に「カフェ」と返ってきたのには驚きました。デザイナーの方が柱や床を作ったというのは聞いたことがありましたが、「カフェ」そのものを作ったというのは初めて聞きました。きっと、Margitさんがこだわりぬいたデザインであふれているすてきなカフェなのでしょうね。New Yorkに行く機会があったら、探してみたいと思いました。

d) 評価・考察

学生から英文で創造性と日本の教育に関する

コメントがあったが、その発想に私自身はとさせられた。今回は日本語のものが半数以上で優勢だったが、日本語で書かれているものも、通訳を介さずに英語の内容がよく理解されており、その上で自由な発想で書かれてあることに注目してもらいたい。第二言語として話者が話す英語を、視覚的要素を交えながら聞くメリットおよび話し手の人柄などの要素も加わるとは思うが、理解が進んでいることに驚く。前述のマリーン・キの講義でも自由な発言を妨げる教育・閉塞感の暗示があったが、自戒もこめて今後考えていかななくてはならない課題だと思った。異文化との接触はまさに、このような自国への新しい視点へと発展する。語学の教育だけではなく、貴重な副産物であると受けとめた。



図 3

おわりに

あらためて学生のコメントを読み返してみると、只中にいたときには気づかなかった多くのことに気づかされ、第二言語で書かれているにもかかわらず若者の真摯な感性が伝わってくる。来日している招聘アーティストたちとの交流をすることにより、学生に異文化体験を促す。われわれと同じように母国語ではない第二言語としての英語を使いこなす人はなにも特異な人々ではない。世界のごくありふれた人たちである。ネイティブ・スピーカーのように流暢に話す必要はない。生活の、仕事のツールとして語学が生かせればよい。これまでの人生で英語を話さ

ずともさしたる痛痒も感じずにいても、学生である彼らの未来は無限大である。いつどんな世界に飛び込んでいくことになるかわからない。そのときどんな動機が彼らを突き動かすことになるか。そのための準備をしてあげたい。そして副産物としてそれぞれの国の事情や背景を知り、さらに経験を深め視野を広め、より人間的な幅と厚みを広げて成長していつてもらいたい。これらの授業が学習者にとって、そうした目的の一助になったことを願いつつ、拙論の結びとしたい。

謝辞

さまざまな思いで始まったこの共同授業であったが、製作と行事の合間を縫って実に忙しい中、余分な仕事を引き受けて下さったアーティストの方々には深甚に感謝申し上げます。またご協力いただいたACACの館長、浜田剛爾さん、学芸員の真武真喜子さん、日沼禎子さん、近藤由紀さん、AIRSコーディネータの斉藤誠子さん、LRR室長の神山恵美子さんに、さらに合同授業にご協力いただいた松原勝子先生、マリナ・村尾先生に、そしてたくさんの貴重なコメントを寄せていただいた学生 みなさんに心からお礼を申し上げます。

(2007年12月17日受付、2008年1月17日受理)

参考文献

- 1) O'Malley, J. et al. (1990). Learning strategies in second language acquisition. P.24. Cambridge Univ. Press
- 2) Herriegel, E. (1948). Zen in the Art of Archery. Vintage Spiritual Classics
- 3) 国際芸術センター青森AIR実行委員会. (2004).国際芸術センター青森 2003年秋のアーティスト・イン・レジデンス・プログラム 記録集. P. 57
- 4) 国際芸術センター青森 (2003). 展覧会の記録 2003年秋のアーティスト・イン・レジデンス(AIR)プログラム「ヴァナキュラー・スピリット:Vanacular

- Spirit . 2007/12/14 : http://www.acac-aomori.jp/air/2003_autumn/works_and_artist_2003_autumn_air.htm.
- 5) 国際芸術センター青森 (2004). 展覧会の記録 アーティスト・イン・レジデンス・プログラム2004年春「自然との会話～わたしと自然のあらたな物語」. 2007/12/14 : http://www.acac-aomori.jp/air/2004_spring/works_and_artist_2004_spring_air.htm.
- 6) Grishin, S. (2003). Marine Ky : Ancestral Memories. catalogue essay, "Marine Ky". Australian Galleries, Sydney
- 7) 国際芸術センター青森 (2004). 展覧会の記録 2004年アーティスト・イン・レジデンス・プログラム 2004秋-D I ・ S T A N C E ディスタンス:ふたつの位置-. 2007/12/14 : http://www.acac-aomori.jp/air/2004_autumn/works_and_artist_2004_autumn_air.htm.

付録 1

Meeting with _____ at ACAC

Class: _____ Name: _____

Listen to the talk, and ask questions to Mr./Ms. _____ Find out about his/her job, art work, and any background information. **Write in English.**

1. Write at least 5 things you learned about Mr/Ms. _____ and his/her art work.
1)
2)
3)
4)
5)

2. Write at least 5 things you learned about him/herself and his/her job, country, etc.
1)
2)
3)
4)
5)

Comments:

付録 2

Reading Questions about Marine Ky – First Paragraph Class: _____ Name: _____

1. How old was she when she left Cambodia?
2. What is Phnom Penh?
3. Does she remember her birthplace well?
4. Where did she go through when escaping from Cambodia?
5. Where did her family live after getting out of her country?
6. Was she with her family in Macao?
7. Where did she receive her education?
8. Where did she go to live after Paris?
9. Who did she meet in Melbourne?
10. What does Violeta do?
11. What does Violeta teach Marine?
12. What did she study?
13. What degree did Marine take at the School of Art?

付録3

Meeting with Marine Ky

Class: _____ Name: _____

Write your questions here. How did Marine respond?

1. _____

Answer:

2. _____

Answer:

Write at least 5 things you learned from Marine Ky

1.
2.
3.
4.
5.

Write your message for Marine here.

--

付録4

Artist Talk by Gerle Margit

@ACAC

10:50-12:00, July 2005

1. Glossary

art work	美術作品	botany	植物の
biomorph	偽自然物 (マーギットさんの造語。どういう意味でしょうか?)	cardboard	ダンボール紙
pseudo-shadow	擬似的な影 (*pseudo= not real)	crypto-zoology	神秘的動物生態
drawing	素描、絵画	ritual	儀式の
frottage	フロタージュ(写し絵の技法)	spiral	螺旋
hemp bandage	麻ひも	installation	インスタレーション
paper clay	紙粘土		「設置する」70年代以降、絵画や彫刻といった指示句では一括できない作品を指示する。ある特定の場所に芸術作品を設置することを意味する。
layers	層に重ねること		
pulsate	鼓動		

2. Write here some of the new words you learned today. What do you think they mean?

New words	Possible Meaning

3. Questions for Margit. Try ask her!

Examples:

Where in Hungary are you from? Do you enjoy your work? What inspires you most? ..etc.

4. Answer the following questions.

- 1) What is her family name?
- 2) Where in Hungary is Margit from?
- 3) What name did she give to her art works this time?
- 4) What did she use to make her art works this time in Aomori?
- 5) Why did she use hemp bandage?
- 6) Give 2 words from which Margit made the word biomorph.
- 7) What does biomorph mean?

5. Your comments, thoughts, messages for Margit.

Learning by Experience

— Artists in Residence, Japanese Students and a Class in EFL —

Megumi Tada

Abstract

This paper describes and evaluates several English courses for Japanese students at Aomori Public College (APC), which were conducted in collaboration with the Aomori Contemporary Art Center (ACAC). ACAC has a program called "Artists in Residence", which invites selected artists from in and out of the country. The invited artists stay at ACAC for a few months and concentrate on their artwork. APC and ACAC are adjacent in location, which enables the college students to meet these artists and have them as guest speakers, or visit them on site to look at their work. The two groups can exchange ideas, and get to know each other's countries and backgrounds. English was used as the link language to promote communication between the artists and the students. The article evaluates several features of the class, including the role of English, class format depending on student proficiency level by looking at the overall background, the steps taken, and the students' feedbacks. The author concludes that the experiential classes like these can provide students with opportunities to use English as a second language, raise awareness of their own capabilities, and enhance their recognition as global citizens.